
ラブカクテルス その59

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その59

【Nコード】

N0646E

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は龍も空に昇りそうなカクテルをご用意しました。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は登り龍でございます。

ごゆっくりどうぞ。

やっと俺は探し当てた。

ありったけの金を握り締め、そのドアを軽く三回叩く。

コツコツと案外カン高い音が無愛想な廊下に響く。

そこには、異様とも言える空気が確かに俺に絡みついていき、取り巻いているのが分かった。

すると、ドアの向こうから、合言葉は？、と重い声がした。

俺は答えた。

イカヅチが登る。

冷たい音を立てて、ドアはゆっくり開いた。

そして俺の目の前には、スキンヘッドで貫禄ある男が、ドスの効いた声で部屋の中に入るように案内してきた。

ここは、知る人ぞ知る有名な刺青の店。

しかし看板も、広告もない口コミだけで知られる名店だった。

ある者は、その場所さえ、探すのにガセネタを掴まされて見つかられずに彷徨い、或いは騙されて違う店に行ってしまうたりと、本物のこの店にたどり着くには、かなりの難しさがあった。有名だけに、その偽物は多く出回ると言うことか。

しかし俺は、この秘密の合言葉と共に、そのベールに包まれたこの場所を、ある理由で教わったのだ。

だから確かにここがその、真正正銘の名店なのだった。そのキツカケはとても稀な話から始まる。

俺は漁師をしていた。

いつも荒波に揉まれ、冷たい海のしぶきを浴びながら網を引く。そんな頃の俺には、まるで刺青なんかには興味などなく、むしろそれをしている連中をバカよばわりさえしていた。

しかし事件は起こった。

ある晴れた朝、珍しく穏やかな快晴で、カモメ達も軽やかに、吹く風に乗ってホバリングを楽しんでいた。

俺は甲板の上で網を結直しながら、その平和な一時に寄りかかっていた。

その船には、俺の他に荒くれ者が十人ほど乗っていたが、そんな中でも俺はペイペイで、雑用はほとんど俺の仕事となった。

船長は俺の伯父にあたる人で、俺がガキの時分に札が付いた悪だつたため、手を妬いた親が、刃には刃を、悪には悪をと、俺を厄介払いた、その先がこの船だった。

伯父はそんな俺をかわいがってくれ、乗り込んで間もない内から、厳しく優しく色々な事を叩き込んでくれた。

そして負けず嫌いな俺は根性を張ってそれに体当たりでぶつかっていった結果、その船の誰もが認めてくれるまでに、それ程時間は掛らなかった。

なぜなら荒くれ者と言っても、ほとんどが俺の親父位の歳の人ばかりで、そして何しろ、漁師は一回海に船を出そうものなら、三ヶ月

は陸には戻ることが出来ずに、当然子供にも会えない。

そんな親父達の子供の代わりに、きつと俺をかわいがってくれたのが理由の一つにあったのだろう。

皆、本当の男ばかりがこの船には乗っていて、俺は学ぶことも数知れないくらい、そしてそれが意外に楽しかったのだった。

そしてそんな日々の出来事。

それまでは、あれだけ穏やかだった空はみるみる内に怪しい雲に覆われた。

俺は、その異様な天気思わず船長を呼んだ。

すると船長は、その空を見て、ヤバいつ！と叫んで乗組員全員を甲板に叩き出した。

皆はその雲を見上げると、あんな荒くれ者達のであったはずのその姿は、震えと脅えに表情を歪ませて、まるでそれはお化けでも見た子供のような顔だった。

その雲は黒く、上の方で雷を光らせて、かなりの荒れ模様だと見てとれた。

船員の誰もがそれを見て、暴れ龍だ！と言い、甲板上はいきなり慌ただしくなった。

俺は何のことかわからず、周りの慌て様に混乱した。

ある者は自分で自分を柱にくくりつけようとし、ある者は救命浮き輪を持てるだけ持ち、ある者は訳も分からずに、いきなり殴り合う始末だった。

他に酒を煽る者や、天に向かって叫ぶ者、皆が半ば半狂乱に陥っていった。

すると、そんな様子を見た船長は、皆に向かって、逃げるな、戦え！

と、一喝を入れた。

全員の動きが止まった。

船は、もの凄い揺れ方になってきた。

皆は甲板であっちこっちに転がり、手も足もでないといった感じだ。

しかし、船長は皆に手を繋ぐように言った。

それぞれが、近くににいる者の手を強く握り合い、そのうちそれはガツチリとした円陣になり、そして全員がその空を見上げて叫んだ。来るなら着てみる！

黒い雲はもう船の上を完全に包み込み、そしてその雲から、物凄いイカヅチ。

それはまるで、いや、確かに大きく口を開けた龍そのものだった。龍は、船目がけて光ったかと思つた瞬間、目にも止まらぬ速さでいきなり体当たりをして、俺達が乗つたままの船を真つ二つにした。しかし船長をはじめとした全員は、そんな中でも、組んだ円陣を崩さなかつた。

そして海に投げ出されても尚、浮かびながら保たれたその円陣に、なんと龍は、光を以前にも増して、その俺達の描いた輪を潜るように、天高くから突つ込んで来た。

皆は悲鳴を挙げながらそれに耐えた。しかし不思議と、雷が水を通つたはずなのに、俺達は感電することもなく、何やら温かい感触を感じた。

そして龍が俺達を潜つり終わった瞬間、雲は晴れ、辺りは何もなかつたかの様な穏やかな天気へと戻つていた。

皆は円陣をほどき、海にプカプカ浮いた。そしてその中の船員の一人が呟いた。

龍に気に入られた。と。

それから何日となく、全員はプカプカと海を漂い、気が付くと仲間
の漁船が通りかかり、助けられたのだった。

そして陸に戻つてからはしばらく、何もやる気が起きずに、ただぼんやりとする生活がなんとなく過ぎるだけだった。

そんなある日、俺は背中に激しい痛みを感じ、上半身裸になって鏡を見ると、凄まじい水膨れが出来ていた。

そして驚くことに、その赤々と腫れた水膨れは、龍の様な模様をしていたのだった。

俺は訳も分からず、だが激しい痛みを耐え、とりあえず船長である伯父のところに連絡を入れたのだった。

伯父は今から行ってやるから待っていると言っていると電話を切ると、直ぐに俺の部屋に来てくれ、その背中を見るとこう言った。

今回、お前は選ばれたらしい。と。

伯父は、何の事かわからない俺に、まず背中に水を掛けると痛みが治まるからと、バスルームに俺を連れて行き、優しくそれをしてくれた。

初めは冷たいと思っていた水は、意外にも冷たいどころか、気持ちよかった。

伯父の言った通り、痛みはだんだんと治まった。

それをしてくれながら伯父はこんな事を語り始めた。

昔、伯父がまだ船を自分で持つ前の話、一緒にやっていた漁師の若い衆達と漁船に乗り込んで漁をしていた、そんなある日、そう、その日も穏やかな天気と海。

しかし突然の黒い雲に、稲光。それは前回、俺も体験した龍が現れたそれと同じ話だった。

だが、違っていたのは、その時の龍は船を破壊した後も、海面に必死になって泳ぐ仲間の漁師を次々に、稲妻のままの姿で凄い速度で体を貫き、殺していったところだった。

この龍は昔から、漁師仲間の間で伝説として語り継がれているもので、それは海の守り神なのだという。

人々が無駄に魚を捕って、それを粗末にしたり、やたらめったら海を汚したりすると、時々忠告の意味で現れて、漁船を襲うそうだ。

しかし、龍にはもう一つ目的がある。

それは子供を産む事だった。

龍はその襲った中の一人の体に、それを産み付けていくのだと、伯

父はいきなり上着を脱ぎながら言った。

初めて見た伯父のその背中には、なんと、大きな龍の刺青があった。それはまさに、俺の今背中にできている水膨れの模様そのものだった。

伯父は、その時に一人生き残ったのは俺だったと言った。

そして、この背中にある龍を取り出せる男は、この世で一人しかいない有名な彫り師だけだと、その居場所や、出入りするための合言葉、などを教えてくれた。

その後ため息をつきながら、今回は皆が死なずに済んで良かった。今でも、あの時の仲間の船員の悲鳴が耳について離れないからなと、少し涙混じりに伯父は語り終えると、早目にヤツのところを尋ねるといいと言いつつ、肩をいつもより落としたまま、帰って行ったのだった。

俺はなかなか普段なら信じない話を簡単に受け入れ、そして彫り師のところに行くことを決めたのだった。

かなり分かり難い場所にあったためか、迷いながらも、やっとのととでたどり着いた刺青の店の中は薄暗く、不気味とも言えた。

奥に通され、ただの飾りさえないベッドがあるだけの部屋に案内された俺は、男に訳を簡単に話すと、その男は金などはいらないと言つて、俺にうつ伏せにベッドで横になるように言った。

俺は大人しく言った通りにし、いきなり刺青を背中に彫られることへの不安と、痛みへの心構えをしようとしたが、時既に遅しだった。ジリジリと痛みを誘う音と共に、今までに味わったことのない激痛が背中を襲う。

俺はなるべく声を出さないように努め、ベッドの足を握る手の力を必死なつて入れ続けた。

その墨を肌打ち付ける機械は、俺の背中をなぞり、特に骨の上や、神経が集まっている脊髄の周り、しりの上辺りは耐えるのに

ジツとしていられないくらいの痛みで、くいしばる歯はメキメキと悲鳴を挙げて軋み、そして呼吸は荒くなった。

しかし昼に始めたそれは、日が落ちてもぶっ続けで行われ、俺は普段使わない筋肉に力を使っただけで、軽い痙攣と、攣りを起こした。しかし刺青を彫る痛みには到底敵うものではなく、それが痛いとかわかっていても耐えるためへの筋肉の硬直は反射的で止めることなどできずに、そのうち俺は疲れのピークを迎えて、意識が遠くなるのを憶えた。

しかしその瞬間、彫り師は叫んだ。

できたぞ。とうとう出来たっー！

すると俺の背中は金色に光り出し、そこから見事な黄金の龍が姿を見せ、そして強烈な鳴き声と共に、その建物の窓を潜り抜けると、空に向かって凄いい勢いで登って行き、やがて見えなくなった。

彫り師は額の汗を拭い、その姿に手を合わせてブツブツとお経のような言葉を短く呟くと、とても安らかな顔をした。

そんなことも含めて、痛みも忘れて全てを見た俺は、ようやく自分の背中を鏡に写して、その彫り師の腕前に関心、いや感動した。

実に見事な、頭が三つで尻尾が二本。それに大きな翼がある龍。

彫り師は、それを見ると満足そうな笑みを浮かべ、難産で最高に苦労したが、最高の作品になったと、自慢気に言った。

俺も背中に残った痛みがだんだんとヒリヒリしているのを思い出しながら、言いようのない高揚が心にあることを不思議に思いながら、なぜか涙を流した。

それから何日かして、しばらくは風呂に入らないように言われて我慢していた日々がようやく終わり、久しぶりの風呂につかうと、俺は温泉に行く事にした。

半分はこのところの疲れを癒しにと、もう一つはこの背中を、何だか誰にでもいいから自慢したいのがあったからだ。

俺の住む漁師の村から二つほど山を越えたところの宿場町は、この

辺では有名な温泉地だ。

俺はそこに行くことに決めた。

バスで揺られて一時間ほどで、俺はそこに着き、適当な大浴場がある温泉宿に声を掛け、早速一風呂浴びようと浴室に向かった。

その宿には、なんだかあちこちに凄みのある連中が集まっっていて、普段の俺ならば少し怖じけづくところだったが、今日の俺はその逆。むしろ、絶好のギャラリイ達の群れにそれらは見えてとれた。

俺は誇らし気に服を脱ぎ捨て、浴場の引き戸をカラカラと開けた。中は湯煙でしばらく何も見えなかったが、中からはカッポーン、ザーと、多くの人の気配がする。

俺は誰もまだ見えないのをいい事に、少し顔をニヤつかせた。だんだんと中に入るにしたがって、湯煙が薄くなると、そこには洗い場が壁沿いに幾つもあるらしく、背を向けて座っている男達の広い背中が少しづつ見えてきた。

俺は胸を張り、その空いている真ん中の場所に陣取るうとした瞬間、体が固まった。

なんと、近づいてはつきり見えるようになった、その並んだ背中には、俺と、俺の背中と同じ幾つもの龍達が、、、

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げます。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0646e/>

ラブカクテルス その59

2010年10月11日02時17分発行